

Historian's View

NO. 36

□環境をテーマとした国際大会

- はじめに^{ことば}言があった
- 基調講演に枝廣淳子さん起用
- 準備いろいろ
- いよいよ大会本番
- もうひとつの「環境」大会・IYC
- 大会環境宣言

2011年5月19日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

まえがき

2010年8月に横浜で開かれた第69回国際大会は、大会史上、極めて画期的なものでありました。それは、大会テーマを「環境」として、大会全体を、地球が直面している環境問題を認識しようという狙いのもとに設計し、実行したからです。

国際大会のプログラムは、毎回、ほとんど同じ枠組みで行われています。ですから後になって、単にそれぞれのプログラム、たとえば、基調講演、分科会、エクスカッション、エンターテインメントごとに何をやったかを比較しますと、横浜大会を貫いていたものが見えなくなってしまいます。

そのため、ここでは第69回国際大会の『環境』プログラムにスポットを当てて、まとめました。

たまたま、私自身、プログラム委員の端におりましたので、若干、その思い入れが加わるかもしれませんが。

「環境」が大会テーマに

パシフィコ横浜を会場とした2010年の国際大会の開催が、2007年8月、オーストラリア・アデレードの国際議会で決定しました。3カ月後の11月29日、大会ホストコミッティー（以下HC）は、大会テーマを「環境」と決めました。各委員から清水弘一プログラム副委員長（後に委員長・仙台青葉城）のもとに寄せられたアイデアは、「環境」、「平和」、「友情・奉仕」、「ワイズダム」に大別されました。その中から、①具体的であり、大

会期間中を含め、目に見える取組みができる、②時宜を得たテーマであり、日本の先進性をアピールできる、③企業の協賛を得やすい、④YMCAの取組みとも連動できることなどから「環境」が選ばれたのです。

2008年は、世界の国々が地球温暖化対策に取り組むための「京都議定書」が動き出し、2009年のコペンハーゲン会議に向けての作業がスタートした年でありました。

次の委員会で、発信する大会テーマを「『いのち』未来への継承ー私たちの地球のためにー」（『From Our Hands, We Pass Nature's Torch』）と決めました。続いて大会シンボルマークが公募で選ばれました。これは、差し出した掌に、自然を表す緑の炎が燃え、炎の先には小さなハートが無数、描かれて、地球、環境への愛、思いやりを表現し、開催年と開催地、YOKOHAMAと2010を配したものでした。

初めに^{ことば}言があった

「環境」の具体的なプログラム化は、当然、プログラム委員会が担当することになりました。

スタート時のプログラム委員は、国際大会未経験のメンバーが多かったため、国際大会理解のために多くの日時を割きました。その中で、今城高之（横浜つづき）・木原洸（東京西）・阪上照明（東京銀座）・山崎常久（東京江東）4委員が、主に

環境関連を担当することになりました。

委員会にとって、「環境」の2文字は重荷でした。突き詰めれば詰めるほど、壁にぶちあたりました。

CO2削減を謳いながらも、どんなプログラムを計画しても、CO2を生むことになります。現代の私たちの生活では、楽しさや幸せは、エネルギー消費に繋がっているからです。夏の真盛りに横浜の大きな会場でクーラーを効かせて開催して良いのだろうか、何よりも、世界中から人を集めること自体が問題ではないのかの議論にもなりました。

また、ワイズメン世代に責任のある人為的な温室効果ガス増加のツケを生涯、払い続けていくことになる若い世代にバトンタッチをする（Pass Nature's Torch）ということは、どういふことなのだろうか、という思いもありました。

『甲子園の詩』（阿久悠）には、「あかあかと人の心の燃える祭りが夏と云う姿を借りて日本列島に満ち溢れる」「祭りは／故郷へ帰ることであり／今一度、青春を思うことであり／肉体の活力と純な精神に大いなる憧憬を抱くことである。／生きる／活きるが同じ意味を持つ／なんとすばらしいことか」とあります。大会も祭りだとすると、「環境」をどうからませたらよいのか。

また、大会期間の8月5日～8日は、広島の前爆記念日と重なることから、日本人としては「平和」への思いを参加者と共感するプログラムも加えたいという意見もあり、全体のまとまりを配慮する必要がありました。

基調講演を枝廣淳子さんに

大会プログラムの中心は、基調講演でした。これが横浜大会の環境に対するスタンスを決めることになります。軸が決まれば、分科会、全体フォーラム、そして最終日の大会宣言へと、タテ糸が通ります。

講演者の候補として、米国の環境政策を推進し、『不都合な真実』の著者であるアル・ゴア元米国

副大統領、各種低公害車の開発を進める自動車メーカーのトップ、学者、ジャーナリストの名もできました。種々の調査・検討の末、最終的に環境ジャーナリストで英語の堪能な枝廣淳子さんに決めました。

枝廣淳子さんは、東京大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。環境に関するNGOを運営し、世界中の情報を収集し、分析・発信するかたわら、福田内閣、麻生内閣の「地球温暖化問題に関する懇談会」委員なども務め、企業や自治体、一般市民を対象に「温暖化」「生物多様性」「環境とビジネス」などのテーマで多くの講演を行っていました。主な著書に『朝2時起きで、なんでもできる!』、『地球とわたしをゆるめる暮らし』、『企業のためのやさしく分かる生物多様性』、主な訳書には『成長の限界 人類の選択』、アル・ゴア著の『不都合な真実』『わたしたちの選択』ほか多数ありました。

「幸せは増やしていこう。でも、それに伴う物質やエネルギーは減らしていこう」、「環境問題は政府や政治家に任せるのではなく、ひとり一人が思いをもって変えなければならない」というスタンスでした。

プログラム委員会としては、世界中から集まったワイズメンが大会の場で、自国の立場のみを主張し合うようなことはしたくない、個人として、クラブとして、何か出来ることを持ち帰れる大会にしようと考えていました。併せて、この講演会を市民へ公開にすることを決めました。

枝廣さんからは、講演を聴いた後に、10分でもよいから、その場で数人ずつで、聞いたこと、考えたことを話し合うバズセッションを勧められました。しかし、時間配分から、これは困難でした。第3日目の全体フォーラムのモデレーターを枝廣さんに依頼して、フロアを含めた意見交換をすることにしました。

カーボンニュートラルに代えて

大会を開催するために、あるいは大会に参加す

るために排出してしまう CO2 の問題がありました。これを吸収し、ニュートラル（帳消し）にするために要する金額を専門のプロバイダーに拠金する方法があります。さまざまな情報を検討しましたが、これを個人が負担するのか、大会として負担するかの問題があり、すでに、大会参加費も決まり、予算も決まった段階では、これらを覆して実施することの理解が得られにくいという判断で、断念しました。

その代案として、大会中に募金をして、大会開催地である横浜市の水源、道志川の函養林の整備プロジェクトのために寄付することにしました。

横浜市は、大正時代に市の水源として山梨県道志村の山林 2,800 ヘクタールを買収し、現在まで維持してきましたが、近年、一般に開放し、環境問題に対する啓蒙活動としています。賛同者は、1ヘクタールあたり年間 30 万円を納めます。3年間継続するのが基本で、1ヘクタールあたり年間 10 トンの CO2 を吸収できるとのことでした。

大会環境宣言

大会最終日には、大会としての「環境宣言」をしたいと考えていました。

国際協会には、環境タスクフォース・グリーンチームが組織されていて、そのリーダーのコリン・ランビー委員長（Colin Lambie・オーストラリア）は、終始協力的でした。大会環境宣言は、大会の分科会で協議するとして、ランビー委員長からは、大会前にたたき台とも言うべき案が送られてきました。すべてが地球温暖化対策の感があり、日本としては、もう少し幅の広い環境問題として捉えたいとのコメントを返しました。

その時点のプログラム委員会は、出演者交渉、役割決定・依頼、時間調整、会場・舞台づくり、和英文台本作り、聖歌隊結成など、従来からのプログラム委員会業務で、火事場の様相を呈していました。それ以上の検討は、大会中に持ち越されました。

エクスカージョン・エコロジーツアー

過去の一部の例外を除いて、大会中に息抜きと親睦のために日帰りのエクスカージョンが組み込まれます。横浜大会では、5 コースのうちのひとつを「横浜エコロジーツアー」として横浜市内の環境対策を進めている企業、横浜市の環境対策の施設の見学コースを設定しました。

大会中に誰もが具体的に出来ること

4 日間の会期の中で、頭で学ぶだけでなく、自分たちも意識を高め、出来ることを実行しようということで、大会中の「環境十則」を作り、掲げることになりました。

今、横浜でできること—環境を守る十則—

1. 必要のない電気は使いません
2. 水は必要なだけ使います
3. 使ったものは捨てないで、もう一度使います
4. 衣服を調節して、室温を 1℃ 高くします
5. 出来るだけ自分の足で歩きます
6. 自分たちの命が他の生物の犠牲によって成り立っていること思い、食事を感謝して食べます
7. それ以外に方法がないのか考えます
8. そんなに急ぎません
9. 横浜の水源地の樹木を植えるために献金をします
10. 大会中に 10 項目目を自分で考えます

YMCA の活動に参加している大学生が次のように英訳しました。

What we can do now in Yokohama

—Ten things to do

to protect our environment—

1. Use only necessary amount of electricity
2. Use only necessary amount of water
3. Use again what we can reuse
4. Raise A/C temperature 1℃ by adjusting our clothes

5. Walk when possible
6. Remember that our lives depend on the sacrifices of other living things when you eat
7. Think if there are other options in order to protect our environment
8. Pace down our life not depending on technology
9. Make donations for planting trees at the "Water Sources of Yokohama"
10. Think one more "what we can do to protect our environment" during the International Convention

それぞれのエコの努力

大会中とその準備段階での省エネは心掛けること、特に出来るだけ印刷物を使用しないことにしました。

マーシャル委員会は、マーシャル専用のウェブサイト（携帯電話用・パソコン用）を立ち上げました。70人近いマーシャルが必要とする、常にアップツードートの情報を、紙を使わないでケイタイで得られるようにしました。

さまざまな情報提供もウェブとメールを中心にしました。大会登録をできるだけウェブで行うことを奨励して紙（FAX）を減らしました。

・日本各地にいるホストコミッティーメンバー全員が集まる委員会の回数を極力絞って、移動によるCO2排出量の削減を図りました。

1000人を超える大会では、欠食によって膨大なゴミが生じます。大会前に、参加者に直接、食事不要の調査を行って、無駄を減らしました。

「日本の夏祭り」におけるメネット委員会が企画した「ゆかた」提供も、海外からの参加者のお土産としても喜ばれましたが、ダンスに眠る物を利用する一面もありました。

環境保安官の指名

「環境大会」を徹底したい、それもあまり真面目に過ぎるのも楽しくない、ということで、マーシャルとは別に、「環境保安官（Green Sheriff）」

チームを組織することにしました。ユーモアを交えて、笑いのうちに環境を意識してもらおうという狙いでした。

緑色のハット、水鉄砲、ホイッスル、星がついた胸章と100円ショップで揃えたものを加工して標準装備としました。保安官の資格は、男女とも、ケンカができて、仲直りもできる者、でした。Sheriffは、行政権も司法権も持ちます。ただし、水鉄砲の水平発射は禁じました。

会場の展示

会場はスペース的に余裕があり、場内展示にはさまざまなアイデアが出ました。ソーラーカーの展示・試走なども検討しましたが、最終的には、参加各国の政府機関の環境キャンペーンの「ポスター」、「環境こども絵画展」、それに「ワイズメンズクラブの環境対策事業」発表の展示に絞りました。

環境ポスターについては、IYCに参加するユースに持参してもらいました。子ども絵画展は対象をワイズメンズクラブ、YMCAに関わる15歳以下として、各地域会長（AP）を通して各区に応募を呼び掛けてもらいました。日本については、YMCAに依頼しました。

もうひとつの「環境」大会

国際大会と重なるような形で、8月2日から8日まで、国際ユースコンボケーション（IYC）が、静岡県富士山YMCA、御殿場・東山荘で行われました。予想をはるかに上回る30カ国から147人のユースが集いました。

ここでも、「環境」についての学びがありました。ユースの代表を含む国際ユース委員会が決めたテーマは、「環境」、「平和」、国連のプレミアム開発目標「結核蔓延防止」でした。

事前にユース国際代表（IYR）ジェームス・オーレ（James Olle・オーストラリア）とユースインターン（YI）のパスカ・フィヌティア（Paska Hinuthia・ケニア）が来日して、国際大会との

乗り合わせを協議しました。

IYC 参加者は、自国の環境問題の調査の宿題が出ており、それぞれの調査報告と意見をもって参加しました。指導は、環境経済学が専門の細田衛士・慶大教授に依頼しました。

彼らは、話し合いを通じて、自国の深刻な環境問題を直視して、それに対して自分たちが出来るアクションプランを練り、帰国後は、必ずアクションを起すことを約束しました。

挙げられたエリアでの問題は、森林伐採（アフリカ）、光害（香港）、気温上昇（日本・インド・ヨーロッパ）、大気汚染（韓国）、ゴミの分別・不法投棄（スリランカ・タイ）、水質汚染、過度な道路整備・森林伐採（台湾）、水質汚染、水の過使用（カナダ・カリビアン）、ゴミによる汚染・排気ガス、（米国）、水の減少（南太平洋）でした。

コンボケーション中に、富士山 YMCA 敷地内の植樹エリアに、訪問した国際議員も交えて専門家の指導によって 100 本を超える植樹を行いました。

いよいよ開幕・・・公開講演会

第 69 回横浜国際大会は、2010 年 8 月 5 日、開幕しました。開会式の後、枝廣淳子さんによる公開後援会『『いのち』未来への継承ー私たちの地球のためにー』が、行われました。

枝廣さんは、「このままでは、未来世代に美しい地球を手渡すことは出来ません。でも悲観することはありません」として、命を未来に継続するためにと、分かりやすい例を挙げながら、5つのポイントを語りました。

- ① 現在出来ることを積み上げていくのではなく、まず、ビジョンを描くこと、スウェーデンが「2020 年に石油を 1 滴も使わない国」と宣言したように。
- ② 物事の繋がり、見えない関連を考えること。あるアメリカの原住民には、「何をするにも 7 世代後のことを考える」という掟がある。
- ③ 意識があってもなくても、良い行動ができる

仕組みをつくる、または仕組みに変える。人も責めず、自分も責めず、効果的である。

- ④ 本当に大切なものを大切に。持続可能な社会が、日本の江戸時代にはあった。急がずにじっくり考える。
- ⑤ 「伝える」ことを工夫する。理解者を増やしながら行動する。

そして、伝えるためには、言葉よりも行動が大きな力となると結びました。

公開講演会ということで、猛暑にもかかわらず、約 90 人の市民の参加がありました。一般参加者には同時通訳機のレシーバーを無料で貸し出しました。

ユースの提言

基調講演に続き、IYC の会場から駆けつけたユースたちの代表が「環境問題」についてプロポーザルを行いました。それぞれ宿題として自国からもってきた問題点と解決のために自分たちは何ができるかの討議の結果した。

猛暑の中の環境ツアー

エクスカッションは交通委員会が、企画・実行しました。猛暑、それに湘南方面を中心として夏休み時期の交通事情も考慮して、近場にコースを設計しました。5つのコースの中のひとつ「横浜エコロジーツアー」には、バス 4 台に分乗して、約 120 人が参加しました。

横浜市生麦の麒麟ビール鶴見工場で、産業廃棄物の処理などの取り組みについて説明を聞きました。横浜市瑞穂埠頭にある横浜市の風力発電施設では、市職員から詳しい説明を受けました。

巨大な羽根によって、風が強ければ強いほど、発電量が増えると思っていて、強風の時には危険防止のために停止させると聞いて。驚いた人もあったようです。

暑さの中、ビール工場での 3 種類のビールの試飲が効きました。

全体フォーラム

大会3日目、「持続可能な社会に向けて—私たちが出来ること—」をテーマに全体フォーラムが行われました。モデレーターは基調講演の講師の枝廣淳子さん。コリン・ランビー国際グリーンチーム委員長、フィリップ・マサイ次期地域会長（Philip Mathai・インド）、アン・マリー・ヘンツ・ジェンセン元地域会長、（Anne Marie Henzt-Jensen・デンマーク）、杉浦眞紀子西日本区元事業主任がパネリストを務めました。

ランビーさんは、自らの家庭、クラブ、地域、YMCAでの環境への取り組みを紹介し、ワイズの仕事についてウェブサイト上で広報することによって、エクステンションにつながると話しました。マサイさんは、環境問題を、貧困、教育、衛生、技術移転、人口抑制など多面的に捉えるべきと主張しました。ヘンツ・ジェンセンさんは、デンマークの環境政策や状況を説明し、エコ活動を実践することは政治家をリードすることにつながると述べました。

杉浦さんは、西日本区には、地域奉仕・環境事業があり、マイ箸、環境マラソンなどの事業を行い、東日本区では、家庭の電力消費量削減のキャンペーンを実施していることを紹介しました。その上で、私たちがやらなくてはならないことは、関心を持続すること、共有すること、そして多少の犠牲は払うことだと主張しました。

枝廣さんの巧みな誘導で、会場からも活発な意見や質問が出されました。「それぞれの生活の場での取り組みについての意識を確認する時となった」との感想もありました。

その日の夕食時には、京都めいぶるクラブのメンバーでもある福山哲郎環境副大臣のメッセージも披露されました。

「環境」分科会

今大会では、メネットを含めて6分科会が設けられ、休憩を挟んで、2時間が当てられました。環境分科会には、約20人が参加しました。

会は、コリン・ランビー・国際グリーンチーム委員長の司会で始まり、大会の環境宣言の草案を参加者が、質問や意見を述べ、議論をしながら煮詰めました。討論を進める過程で、さまざまな環境問題の中で、特に気候変動がもたらす生命への脅威が現実のものとして認識されました。すべてのワイズメンが、地球環境への悪影響を減らす努力を行動で表して、カーボンニュートラルを実現させようなどと話し合われました。

環境ポスター展とこども絵画展

4日間を通して、会場ロビーで、「世界の環境ポスター展」と「環境こども絵画展」が行われ、東日本区は、区が呼びかけて、2008年-2009度を実施した省エネキャンペーン（電力使用量の削減）の成果を発表しました。

「世界の環境ポスター展」は、各国の政府機関が制作した環境キャンペーンのポスターを、IYCに参加したユースが持参したもので、地球の環境対策が世界中で共通の重大関心事であり、国によってその力点が違うことが実感されました。

「環境こども絵画展」には、4カ国から290点を超える作品が集まりました。募集期間が短かったこと、各地地域会長を通じての募集だったため、応募が少ないのではとの懸念を吹き飛ばしました。国別では、日本、ロシア、デンマークから多く応募がありました。日本では、地元横浜YMCA、十勝YMCAの作品が目立ちました。観客の皆さんの投票によって、11点を優秀作品としました。

ハブニングだった「打ち水」

大会中、ユースがプログラムになかった「打ち水」をやりたいと言い出しました。道に水を撒くことによって気温をさげ、涼風を呼ぶことは日本の昔からの生活の知恵です。これは突然の思いつきではなく、日本のユースたちは、温暖化対策案として、「打ち水プロジェクト」をつくり、英語と日本語の大人用と子ども用のポスターを用意していました。会場前の道路で行いましたが、珍

しく、だれでもできるこのパフォーマンスには、多くのワイズメン、ワイズメネットも参加して、ひしゃくで水を撒きました。

ユース達は、横浜市の水源対策の「道志川プロジェクト」への拠金のために、会場内を募金箱を持って回り、約 22 万円の献金を集めました。HC は、大会後、50 万円として、横浜市に贈ることにしました。

ユースコンボケーションの発表

最終日、154 人のユースが国際大ホールに登壇して、1 週間、寝食を共にして学び、語り合った IYC の報告をしました。環境問題については、初日に発表した問題点に対して、自国に帰り、それぞれ自分たちが出来ること、やりたいことを宣言しました。次のような事柄が挙げられました。

森林伐採への警告、絶滅危機の樹木の植林、光害の危険性の啓蒙、打ち水の普及活動、大気汚染によって枯れた森の復活、ゴミの分別、缶、びん、ペットボトルのリサイクル、除草剤・殺虫剤の使用を減らす、自然洗剤の使用、木の伐採の制限、リユース出来る物の使用、エコバッグの使用、水の貯蔵庫をつくる、車の相乗り、自転車の利用、徒歩での移動、公的交通機関の利用、募金活動、政府への働きかけ、ポスターなどでの啓蒙活動、署名活動、地域団体との協力、ユースと地元教師との連携などでした。

非常に力強く、頼もしいものでありました。

沢山の内容が盛られた IYC でしたが、大会ユース委員会、日本のユースのリーダーたちの環境についての方向付けによって、散漫になることなく、見事に収れんしました。

大会宣言

大会の最後に、国際大会としては初めてとなる『大会環境宣言』が、国際グリーンチームのコーリン・ランビー委員長から提案され、満場一致で採択されました。宣言は、下記のとおりです。

The Environmental Declaration of Y'smen's International of IC2010 in Yokohama

We recognize the real threat to life due to the changing environment and limited availability of resources.

All members are encouraged to help minimize the impact through their behavior and action.

Y's Men International will be carbon neutral from 2010-2011.

大会事務局によって次のように訳されました。

2010 年横浜国際大会環境宣言

私たちは、「いのち」に対する真の脅威が、環境の変化ならびに資源の限界により、もたらされることを認識します。

全てのワイズメンは、自らの態度や行動により、その影響を最小限にすることが求められています。

ワイズメンズクラブ国際協会は、2010—2011 年度以降カーボンニュートラルを達成します。

あとがき

プログラム委員会は、参加者に、横浜大会が「環境」の大会であることに、どれだけ早く気づいてもらえるかが、重要なポイントだと考えていました。その意識がなければ、苦勞した仕掛けに気づいてもらえません。

当日受付で受け取る袋の中の「うちわ」や、メネットが折り込みチラシを利用して作った「エコバッグ」や、マーシャルが段ボールで作った「カンカン帽」を見ても、「なに？これ？」と言われて終わりかねないのです。

2 つの手を打ちました。ひとつは、大会の真面目な進行役であるマーシャルに対して、ちょっとふざけた狂言回しの「環境保安官」でした。開会式の終わりに、舞台上がって、打ち合わせなしで、マーシャルも絡んだ、スタントを演じてくれました。

受付で配られたコンベンションニュース1号のトップ記事、ゆかた姿の藤井寛敏ホストコミッテ

イー委員長の歓迎の挨拶は、儀礼的な言葉はなく、「反エコの行動をしていると“Green Marshal”に捕まって監獄行きですよ」と凄みをきかせていました。

もうひとつの手は、開会式の感動的なキャンドル点火の種火は、子どもが自然採火した火を運び、子どもによって点火してもらおうということでした。木の摩擦による火起しを映像で流すことにしました。

YMCAのキャンプ場での子どもの火起しをワイズメンが見守っているシーンが私たちのイメージでした。大会まで5日しかない、行動力のあるクラブに頼むのが一番早い、ということで、あるクラブに頼みました。3日後、担当の委員から電話が入りました。この人は映像・音響のプロです。

「映像は届きました。肝心な子どもがいません」

「火を起こしているのはだれ？」

「ワイズメンです」

「子どもは？」「遠まきにして観ています」

「仕方ない、ワイズメンでいっちゃいますか。ワイズかYのTシャツ着てる？」

「いえ、みんな首にタオルを巻いてます！」

コミュニケーション変容というのでしょうか。

それでもプロとは、恐ろしいもので、これでイメージ映像を作りあげました。

横浜国際大会は、現代史ですから、私の守備範囲ではないような気もしますが、環境という視点から書いてしまいました。登場人物の名を書けば、もっと生々しくなるのですが、あれだけ多くの方が表でも裏でも苦勞して、作り上げた大会ですから、特定の方の名をあげることを遠慮しました。

大会が終わって、環境問題について、区や部やクラブにも新しい動きが生まれているようです。

また、東日本大震災後の日本人に暮らしぶりの変化と合わせた展開も見られるでしょう。それは、まさに現代史でしょう。

横浜国際大会の記録は、実行委員会事務局のものが東日本区報2号に、大会中に5号発行されたコンベンションニュースは以下の大会ウェブサイト<http://www.ys-west.or.jp/convnews00j.pdf>で見ることが出来ます。各クラブのブリテンにもそれぞれの視点から記載されていますが、全体を網羅しているのは、例えば札幌クラブの9月号です。